

『ミレナへの手紙』の新しい日付と

1920 年後半のカフカ

中澤 英雄

0 . はじめに

カフカの創作活動には、間欠泉のようにある一時期に集中して出現し、その時期を過ぎるとたちまち枯渇する、という特徴がある。彼の創作意欲の高まった時期は、1912年から14年(『判決』, 『変身』, 『失踪者』, 『訴訟』 [= 『審判』]), 17年から18年(『田舎医者』の短編作品群, 八折判ノートのアフォリズム), 20年(書類束A, B, Cの短編作品群), 22年から24年(『城』と晩年の短編作品群)と、ほぼ四つの時期に分けることができるだろう。そしてこれらの時期が彼の人生上の危機と深く関係していることも、すでに周知の事実である。本稿ではそのうち特に、1920年後半のカフカの文学と人生との関連を考察してみたい。

カフカは1920年8月下旬に、1918年4月以来中断していた文学的執筆活動を再開したのであるが、そのきっかけは、彼のミレナ・イエセンスカとの恋愛関係が危機に瀕したことであった。拙稿「カフカのアフォリズムの謎」[1]は、この年後半のカフカの人生と文学を理解するためには、『ミレナへの手紙』のほか、文学的断片の集まりである書類束A, B, C, そして彼がこの頃編集した『罪, 苦悩, 希望および真の道についての考察』というアフォリズム集を、三位一体のものとして考察しなければならない、と主張したのであった。互いにジャンルを異にしたこれら三つの文学的表現を、相互に密接に関連しあった一つのまとまりとして読むことによって、この時期のカフカの文学的営為に対して、これまでは行なわれることのなかった新たな読解が可能になる。このような視点から、『考察』という未完のアフォリズム集が、カフカのミレナ体験の克服の手段とし

て、ならびに同じ西ユダヤ人の友人であるプロートやヴェルチュが出版した哲学書に対する応答として編集されたという、その成立の由来を解明しえたものと私は考えた。

前稿において私は、1920年になって新たに書かれ、『考察』編集の途中で、1917/18年のアフォーリズムに付加された追加アフォーリズムの成立時期を推定するために、書類束A、B、Cと『ミレナへの手紙』を比較対照したのであるが、その過程において、ユルゲン・ボルンとミヒャエル・ミュラーの編纂になる『ミレナへの手紙・増補改訂版』[2]の手紙の配列とその日付推定に疑義が生じてきた。この増補改訂版は、旧ハース版[3]に比べればもちろん格段に改善されてはいるものの、しかし、

増補改訂版には手紙の配列に、したがって日付の推定にもまだいくつかの誤りがあるように思われる。しかし、私の推定の根拠を説明すると、議論があまりに細部にわたり、しかも紙幅も大幅に増えることになるので、それは別の場所に譲ることとして、ここでは以上の議論だけでも、増補改訂版といえども全面的に信頼できるものではないことは論証できたであろう。(前稿「下」71頁)

と、そこにはまだ修正の余地があることを示唆したのであった。

以上のような推論は、プロート版カフカ全集の『田舎の婚礼準備』の巻[4]に印刷されている書類束Aが、部分的には多少の前後の入れ替わりはあっても、大筋においてはカフカの執筆順に配列されている、という大前提のもとに行なわれたのであったが、このような想定は、書類束の直筆原稿を検討できなかった以上、私にとってはやむをえざる作業仮説であった。しかし、この大前提が成立しないという可能性も当然存在した。そこで私は、次のような但し書きも同時に付加せざるをえなかったのである。

ただし、以上の推論は、書類束Aが執筆順に配列されている、という大前提に基づいてなされている。もし、中国の怪談集からの二つの引用メモや「精神分析学書簡」の草稿などの書かれている紙片に前後の移動があれば、

私の推論は根本的に過ちということになる。確実なことは結局原典批判版の完成まで待たなければならないであろう。(前稿「下」72頁)

こうして、「カフカのアフォリズムの謎」で提出した仮説の当否を、書類束の直筆原稿の参照によって検証することが、未解決の問題として残されたのであった。

さて、私は1991年8月から9月にかけて、DAADの奨学金の援助により、ベルリンで開かれた「日中韓ゲルマニスト共同シンポジウム」に参加したあと、カフカの直筆原稿の一部を所蔵するマールバッハのLiteraturarchivと、原典批判版カフカ全集の編纂にたずさわっているヴッパータール大学の「プラハ・ドイツ語文学研究所」を訪問する機会を得た。この二つの研究所を訪問した目的は、前稿では未解決のままであった書類束の配列を確かめ、私の仮説を検証することであった。マールバッハにはカフカの直筆原稿は『ミレナへの手紙』や、1988年に西独政府によってロンドンのオークションで落札された『訴訟』など、ごく一部しかない。書類束も含む大部分の直筆原稿はドイツにはなく、英国オックスフォード大学のボードリアン図書館に所蔵されているが、これは一般のカフカ研究者には公開されていない。ただし、ヴッパータール大学にもカフカの原稿のコピーがあることも既知の事実であり、私はとりあえずこのコピー原稿によって、書類束の配列について確かめようと考えたのであった。

マールバッハに立ち寄ったあと、9月の中旬にヴッパータール大学を訪れたとき、研究所の所長であるユルゲン・ボルン教授は休暇中で留守であったが、彼の協力者で、原典批判版カフカ全集の編集者の一人であるハンス・ゲルト・コッホ氏は、大学で編集の仕事をしていた。私がコッホ氏に私の希望を伝えると、コッホ氏は、「書類束を含むカフカの遺稿類、断片類は、現在、原典批判版として印刷中で、まもなく出版の予定である。原典批判版全集として印刷される以前のもの、および印刷中のものについては、部外者にはコピーも参照させないことになっている。すでに原典批判版として印刷されたもの、たとえば『訴訟』については、コピーの参照は自由である」と答えた。これは私にとっては大きな失望であ

った。

このようにして、書類束の配列順を原稿に直接当たって確かめるという当初の目論見は空振りに終わってしまったのだが、私はドイツで私の意図を補ってくれる別の論文を入手することができた。それは原典批判版カフカ全集の編集者の一人であるヨースト・シレマイトの「伝達と伝達不可能なもの。『ミレナへの手紙』の日付決定と1920年のカフカの《執筆》によせて」[5]という1988年に発表された論文であった。この論文は、『ミレナへの手紙』と1920年の書類束を相互に関連づけながら、ボルン/ミュラー版の『ミレナへの手紙・増補改訂版』の日付推定を修正するという、私の前稿ときわめて類似した問題を追求していた。この論文において、彼は『ミレナへの手紙』の日付推定について実に見事な推論を行っており、またそれとの関連で、書類束の状態についても新たな記述をしていた。彼の論文によって、プロート版全集の書類束の配列が、カフカ自身の執筆順とはかなり違うことが予想され、すでにこの時点において、前稿には修正の必要性が生じてきた。

そして、ようやく1992年9月になって、コッホ氏が約束していた遺稿集の原典批判版がシレマイトの編集によって出版された。この遺稿集も、他の巻と同じく、テキスト本体と校注巻との二巻構成になっているが、その校注巻においてシレマイトは、1988年の論文ではまだ不十分な記述しかなかった書類束について、用紙の詳細な記述と、それに基づく書類束の新配列およびその日付推定を行なっている。これはカフカの直筆原稿を参照できた者にしかなしえなかった、いわば名探偵的とも呼べるような、精密で見事な推論であった。シレマイトの1988年論文と遺稿集の原典批判版の出版によって、前稿の大前提——プロート版全集における書類束がほぼ執筆順に配列されている、という想定——が、誤りであることが明らかになった。そのことによって、私は前稿「カフカのアフォリズムの謎」を部分的に修正する必要に迫られた。ただし、拙稿の修正の過程において、精緻きわまりないと思われていたシレマイトの議論にも、若干のほころびがあることも明らかになった。以下は、シレマイト論文と原典批判版に触発された前稿に対する修正と補遺であり、同時に、私の立場からシレマイト論文に加える修正

でもある。

1. シレマイトによる『ミレナへの手紙』の新しい日付

シレマイトは「伝達と伝達不可能なもの」という論文において、『ミレナへの手紙』と1920年後半の書類束が密接に関連しているという洞察をもとに、『ミレナへの手紙』の新しい日付を提唱する。彼は『ミレナへの手紙』と書類束を比較対照するほか、手紙の日付を、その中で言及されているカフカとミレナの人生上の出来事から割り出したり、あるいは手紙に繰り返し出現する個々のテーマの変化などを精密に追求することによって、その前後関係を確定したりして、ボルン/ミュラー版の『ミレナへの手紙』の日付推定を全面的に見直した。各書簡に対するシレマイトの論証を紹介することは煩瑣にすぎるであろうし、またそれはシレマイト論文に直接当たればすむことなので、ここではそれには立ち入らず、私は彼の提案に基本的には賛同し、彼の新しい日付推定をまずここに一覧表として紹介しておこう(彼自身はこのような一覧表を作成していない)。ただし、若干の箇所については私は彼と意見を異にするが、これについてはあとで詳しく述べることにする。

表1 シレマイトによる『ミレナへの手紙』の新しい日付

記号の説明：

S = シレマイトによる書簡の順番, Seite = 現在刊行されているボルン/ミュラー版の『ミレナへの手紙』の頁数, 曜日(K) = カフカ自身によって手紙の冒頭に付けられている曜日(欄が空白の時は曜日の記入がない。カッコ付きの曜日は、手紙の冒頭に曜日はないが、文中で曜日が言及されているケース), Datum(S) = シレマイトによる新しい日付(曜日および日付欄の《-》記号は「○日から×日にかけて」の意であり, 《/》記号は「○日または×日」の意である), B/M = ボルン/ミュラー版の書簡番号(ただし、ボルン/ミュラー版には本来このような番号は付けられていない), Datum(B/M) = ボルン/ミュラー版の日付。

S	Seite	曜日(K)	Datum(S)	B/M	Datum(B/M)
1	3			1	April
2	4-5			2	April
3	5		22.4.以前	3	April
4	6-8		8.5.	4	April

S	Seite	曜日(K)	Datum(S)	B/M	Datum(B/M)
5	8-10		9.5.	5	Ende April
6	11-13		16.5.	6	April/Mai
7	17-19		18.5.	8	Mai
8	13-17		24.5.	7	Mai
9	20-23		25.-29.5	9	29.Mai
10	24-29		30.5.	10	30.Mai
11	29-33	Montag	31.5.	11	31.Mai
12	34-35	Dienstag	1.6.	12	1.Juni
13	42-44	(Donnerstag)	3.6.	15	3.Juni
14	44-45	Freitag	4.6.	16	4.Juni
15	45	Freitag	4.6.	17	4.Juni
16	46	Samstag	5.6.	18	5.Juni
17	47-48	Sonntag	6.6.	20	6.Juni
18	35-39	Mittwoch	9.6.	13	2.Juni
19	39-42	Donnerstag	10.6.	14	3.Juni
20	49-53	Donnerstag	10.6.	21	10.Juni
21	53-55	Freitag	11.6.	22	11.Juni
22	46-47	Samstag	12.6.	19	5.Juni
23	57-59	noch einmal Sa.	12.6.	24	12.Juni
24	59-62	Sonntag	13.6.	25	13.Juni
25	62-67	Montag	14.6.	26	14.Juni
26	67	Dienstag	15.6.	27	15.Juni
27	55-57	Samstag	19.6.	23	12.Juni

(以下の 28-65 番[MN 68-145]はシレマイトはボルン/ミュラー版と同じ番号，同じ日付である)

28	68-69	Sonntag	20.6.		
29	70-73	Montag	21.6.		
30	73-76	Mittwoch	23.6.		
31	77-78	Donnerstag	24.6.		
32	78-80		25.6.		
33	80	Freitag abend	25.6.		
34	81	Dienstag 10 Uhr	29.6.		
35	81-83	Sonntag	4.7.		
36	83	So. ein Weilchen später	4.7.		
37	84-85	Sonntag 1/2 12, Montag früh	4.-5.7.		

S	Seite	曜日(K)	Datum(S)	B/M	Datum(B/M)
38	85-90	Montag vormittag	5.7.		
39	90-93	Montag	5.7.		
40	93-94	Dienstag früh	6.7.		
41	94-95	Dienstag abend	6.7.		
42	96	Di. noch später	6.7.		
43	96-97	Mittwoch abend	7.7.		
44	97-98	Donnerstag früh	8.7.		
45	98-100	Do. vormittag	8.7.		
46	100-101	Freitag	9.7.		
47	101-103	Freitag	9.7.		
48	103-104	Samstag	10.7.		
49	104-107	Montag	12.7.		
50	107-109	Di. etwas später	13.7.		
51	109-111	Dienstag	13.7.		
52	112-114	Mittwoch	14.7.		
53	115-116	Donnerstag	15.7.		
54	116-118	Do., später	15.7.		
55	118-119	Do.(nachmittag)	15.7.		
56	119-121	Freitag	16.7.		
57	121-122	Samstag	17.7.		
58	122-127	Sonntag	18.7.		
59	128-131	Montag	19.7.		
60	131-133	Dienstag	20.7.		
61	133-136	Mittwoch	21.7.		
62	137-138	Donnerstag	22.7.		
63	138-140	Freitag	23.7.		
64	141-142	Fr. nachmittag	23.7.		
65	142-145	Samstag	24.7.		

(以下の1通がシレマイトの配列はボルン/ミュラー版とは異なる)

66	252-254	Sonntag	25.7.	103	5.September
----	---------	---------	-------	-----	-------------

(以下の67-94番[MN 145-232]ではシレマイトはボルン/ミュラー版と同じ順番，同じ日付である。
ただし，手紙の番号は異なる)

67	145-148	Montag	26.7.	66
68	148-149	Montag, später	26.7.	67
69	149-151	Dienstag	27.7.	68
70	151-154	Mittwoch	28.7.	69
71	155-157	Donnerstag	29.7.	70

S	Seite	曜日(K)	Datum(S)	B/M	Datum(B/M)
72	157-158	Do. später	29.7.	71	
73	159-162	Freitag	30.7.	72	
74	162-165	Samstag	31.7.	73	
75	165-170	Samstag, später	31.7.	74	
76	170-173	Sonntag	1.8.	75	
77	173-174	Sonntag abend	1.8.	76	
78	174-176	Montag	2.8.	77	
79	176-180	Mo. abend-Di.	2.-3.8.	78	
80	180-183	Mittwoch	4.8.	79	
81	183-187	Mi. abend-Do.	4.-5.8.	80	
82	187-189	Freitag	6.8.	81	
83	190-194	Samstag	7.8.	82	
84	194	Sonntag	8.8.	83	
85	194-201	So. abend-Mo.	8.-9.8.	84	
86	201-203	Mo. nachmittag	9.8.	85	
87	204-208	Dienstag	10.8.	86	
88	208-212	Mittwoch	11.8.	87	
89	212-214	Donnerstag	12.8.	88	
90	214-217	Freitag	13.8.	89	
91	217-222	Di.-Mi.	17.-18.8.	90	
92	223-226	Do.-Fr.-Mo.	19.-23.8.	91	
93	226-230	Donnerstag	26.8.	92	
94	230-232	Do. abend-Fr.	26.-27.8.	93	

(以下の 95 - 102 番[MN 233-252]では、シレマイトの番号、日付はボルン/ミュラー版と一致する)

95	233-235	Samstag	28.8.		
96	236-237		28.8.		
97	237-238	So.-Mo.	29.-30.8.		
98	239-241	Dienstag	31.8.		
99	241-242	Mittwoch	1.9.		
100	242-245	Donnerstag	2.9.		
101	245-246	Freitag	3.9.		
102	246-252	Fr. abend-Sa.	3.-4.9.		

(以下ではまたシレマイトはボルン/ミュラー版とは異なる)

103	254-255	Montag	6.9.	104	6.September
104	256-258	Dienstag	7.9.	105	7.September

S	Seite	曜日(K)	Datum(S)	B/M	Datum(B/M)
105	258-259	Freitag	10.9.	106	10.September
106	259-261(Z.11 まで)				
		Dienstag	14.9.	107	14.September
107	264-266	Mittwoch	15.9.	109	15.September
108	299-301	Sa. abend-Mo.	18.-20.9	126	November 1920
	261(Z.12 から)-263			107	14.September
109	233(Z.1-25)		22./23.9.	94	Ende August
110	263-264		22./23.9.	108	14.September
111	266-269		25.9.	110	18.September
112	269-271	Montag abend	27.9.	111	20.September
113	272-275	夢の手紙	1.10.	113	September 1920
114	275-278		6.10.	114	September 1920
115	278-281	幽霊の手紙書簡	15.10.	115	September 1920
116	281-283	怪談集書簡	20.10.	116	September 1920
117	292-294	精神分析学書簡	20./21.10.	122	November 1920
118	283-284	(Freitag)	22.10.	117	22.Oktober
119	271-272	スケッチ書簡	24./25.10.	112	September 1920
120	284-286	(Mittwoch)	27.10.	118	27.Oktober
121	290-292	ヴェンコフ書簡	1.11	121	Mitte November
122	286-287	(Montag)	8.11	119	8.November
123	294-295		12.11.	123	November 1920
124	287-290		17.-19.11.	120	Mitte November
125	296-297	伝達不可能	26.11.	124	November 1920
126	298-299	(Donnerstag)	2.12.	125	November 1920

(1922 年以降についてはシレマイトは論じていないので，ボルン/ミュラー版をそのまま掲載する)

127	301-304			127	Ende März 1922
128	304-306			128	September 1922
129	306-309			129	Januar/Februar
1923					
130	309-317			130	Januar/Februar
1923					
131	317			131	9.Mai 1923
132	318			132	9.Mai 1923
133	319-321			133	Oktober 1923
134	321-322			134	23.Dezember 1923

表の「夢の手紙」，「幽霊の手紙書簡」などについては以下で説明する。

2. シレナイト論文によって生じた前稿の修正点——ミレナへの手紙の日付と配列について

シレナイトは1988年の論文において、『ミレナへの手紙』の新しい日付について実に見事な推論を展開したのであったが、この論文は原典批判版の校注巻の記述の基盤にもなっている。校注巻の記述を完全に納得するためには、シレナイトの1988年論文を読んでおくことが参考になる。そこで、ここではこのシレナイト論文を紹介しつつ、前稿——特に『ミレナへの手紙』に関する私の推論——に加える修正点を述べることにしよう。

(1) 「精神分析学書簡」，「幽霊の手紙書簡」，「怪談集書簡」および中国の怪談集からの引用メモについて——中国セットの問題

前稿は「精神分析学書簡」，「幽霊の手紙書簡」，「怪談集書簡」と名づけた内容的に相互に関連した三通の手紙について、以下のような順序を想定したのであった。

「中国の怪談集」の読書→「中国の怪談集」からの第一引用メモ(書類束A [H 334])→「精神分析学書簡」(書類束Aのほぼ同じ草稿[H 335])→(この手紙をミレナが「幽霊の手紙」と呼ぶ)→「幽霊の手紙書簡」(カフカはそれに対して、まさにその通りだ、と答える)→「怪談集書簡」(「幽霊」というチェコ語を使って「中国の怪談集」について言及する)→ミレナへの手紙への引用がきっかけになって「中国の怪談集」からの第二引用メモ(書類束A [H 338])(前稿「下」70頁)

そして、「精神分析学書簡」は9月下旬、「幽霊の手紙書簡」は9月終わり/10月初め、「怪談集書簡」は10月上旬に書かれたものと私は推定した。このような推定の根拠になっていたのは、書類束Aの日付順配列という大前提であり、それに基づいて、中国の怪談集からの第一引用と第二引用の間には、若干の時日が経過したであろう、と考えたのである。ところが、シレナイトが書類束を検討した結果、第一引用と第二引用とはむしろ連続して書かれたと考えるべきである、

ということが明らかになった。すなわち、懸念していた通り、「中国の怪談集からの二つの引用メモや《精神分析学書簡》の草稿などの書かれている紙片に前後の移動」があり、前稿の議論のそもそもの出発点が成り立たなかったわけである。このことは重要な問題なので、ここでシレマイトの論旨を詳しく紹介しておこう。

すでに述べたように、これらの手紙の日付推定に重要な役割を演じているのは、手紙と1920年の書類束の「相互浸透(Osmose)」(Schillemeit 1988, S. 269)の関係である。

まず、書類束A, B, Cの用紙であるが、これらの用紙はカフカがミレナへの手紙に用いたのと同じ用紙である、とシレマイトは述べている(Schillemeit 1988, S. 254)。このことは私もカフカ直筆のミレナへの手紙を参照して確認することができた。すなわち、ミレナへの手紙も、ほぼA4判の大きさの紙で、そこに0.9cm x 0.4cmの大きさの水色の格子が入っている。ミレナへの手紙は書類束Cと同じように、半分に折られた状態で記入されている。こうした用紙の同一性からも、『ミレナへの手紙』と1920年の書類束との間には密接な関係があることがうかがわれる。

すでに前稿でも述べたように、個々の断片類の集まりである書類束の配列を確定することはきわめて困難であるが、しかし、一つのまとまった内容の記述が、一枚の紙から別の紙へ連続的に書かれていれば、この二枚の用紙は続けて書かれたものであり、その前後関係は明確に確認できる。さらに、『ミレナへの手紙』と書類束は相互に浸透しあっているので、この両者を対比することによって、手紙の日付から書類束の書かれた日付を推定できる。シレマイトはこのようにして執筆時期が推定できる用紙を「部分セット(Teilkonvolut)」と名づけている(Schillemeit 1988, S. 259)[6]。彼はその論文において、彼が確認した次の四種類の部分セットをあげている。

Spiegelmensch-Konvolut(鏡人セット)

China-Konvolut(中国セット)

>Vor dem Gesetz<-Konvolut(掟の前セット)

>Geständnisse und Lüge<-Konvolut(告白と嘘セット)

カフカはミレナへの手紙 116 番(これはボルン/ミュラー版の『ミレナへの手紙』の書簡番号である。以下でも書簡番号は基本的にはボルン/ミュラー版に従う。シレマイト配列によるときはその旨を明記する)、前稿の命名で言えば「怪談集書簡」に、中国の怪談集からの引用を行なっている。この同じ引用文が書類束の二枚の紙に書かれているが、この二枚をシレマイトは連続して書かれたものだと考え、これを「中国セット」と名づけるのである。というのは、引用文の前半部(第二引用[H 338; KKN 339])[7]が一枚の用紙の裏頁の最後近くに書かれ、後半部(第一引用[H 334; KKN 340])が別の用紙の表頁の冒頭に書かれているからである[8]。この引用文は内容的に連続した一連の記述であるから、この二枚の用紙が連続して書かれたと考えることが自然である、そして、この用紙と中国の怪談集が引用されている手紙 116 番とはほぼ同じ時期に書かれたものだ、とシレマイトは推測する(Schillemeit 1988, S. 258f.)。

さらにこの部分セットの二枚目の裏頁には、122 番の書簡、前稿の表現で言えば「精神分析学書簡」の草稿(H 335f.; KKN 341)が記されていて、その草稿のあと、用紙は空白になっている。このことは、122 番の手紙は 116 番の手紙のすぐ後に、すなわちその数日後に、あるいはひょっとすると同じ日に書かれたものであるかもしれないことを示している、とシレマイトは考える。

シレマイトはさらにこれら二通の手紙との関連で、115 番の手紙、前稿の表現で言えば「幽霊の手紙書簡」を取り上げる。彼はこの手紙に記されているグリメンシュタインのサナトリウム行きの旅行計画と、116 番の旅行計画とを比較すると、116 番のほうがより進んだ計画を述べているので、115 番は 116 番よりも前に来る、と考える。シレマイトの細かい論証は省略するが、彼は 115 番に書かれている医者診察(MN 280)の期日(これはカフカの公文書[9]から明らかになる)から、115 番を 10 月 15 日、そして 116 番を 10 月 20 日、122 番を 10 月 20 日あるいはその翌日と推定した。つまり、シレマイトによれば、これら三通の書簡の順番は、

「幽霊の手紙書簡」(115番, 10月15日)→「怪談集書簡」(116番, 10月20日)→「精神分析学書簡」(122番, 10月20/21日)

ということになり, 前稿での私の推定

「精神分析学書簡」→「幽霊の手紙書簡」→「怪談集書簡」

は間違っていたことになる。

前稿では, 「幽霊の手紙書簡」の中でチェコ語で「幽霊の手紙」と呼ばれた書簡は「精神分析学書簡」だと考えていたのであるが, 「精神分析学書簡」が「幽霊の手紙書簡」よりもあとに書かれたものである以上, このような推論は成り立たなくなる。そうすると, ミレナが「幽霊の手紙」と呼んだのはどの手紙なのか, ということが問題になるが, 私はそれをここで新たに113番の手紙である, と修正しておく。シレマイトによれば「幽霊の手紙書簡」より前の10月1日に書かれたとされるこの手紙には, カフカが見た夢, ミレナの体に火がつき, そのうちカフカ自身の体も火に包まれるという, 『ミレナへの手紙』の中で最も印象的な記述のひとつである夢について語られているが, その最後のところでカフカは,

ところがあなたは以前とは異なって, 幽霊のようで(geisterhaft), [一語抹消]チョークで暗闇の中に描かれたような姿なのです。そして死んだように, あるいはひょっとすると救われたことに対する喜びからただ気を失っただけなのか, 私の腕の中に倒れ込んで来ました。ところが, そうなってもまだ変身が続いて定まりがつかず, 誰かの腕の中に倒れ込んだのは, どうも私らしいのです。(MN 275)

と書いている。ミレナは文字通りこのような幽霊のような描写に満ちた手紙を「幽霊の手紙」と名づけたのであろう。

(2) 掟の前セットと鞭打ちのアフォリズム

次に, シレマイトが「掟の前セット」と名づける用紙の検討に移ろう。書類束Bには次のような断片が書かれている。

私は最初の番人のところを走りすぎた。通り過ぎたあとになって私は驚き、また駆け戻って、番人に言った。「お前がよそ見している間に、ここを走り抜けてしまったよ。」番人はぼんやりと前を見て、何も言わなかった。「こんなことはきっとすべきじゃなかったんだろうね」と私は言った。番人は相変わらず沈黙したままだった。「お前が黙っているというのは、ここを通ってもいいという許可を意味するのかい？ (H 359; KKN 343)

プロートは彼の全集版の注解において、この断片は『掟の前』の異稿である、と述べているが(H 453)、シレマイトもプロートと同じ見解である。1914年に書かれた『訴訟』の一部であり、1919年に出版された短編集『田舎医者』にも独立した作品として採用された『掟の前』を、1920年秋になってカフカはなぜ書き改めようとしたのだろうか。シレマイトはこの断片を、1920年10月24日にチェコ語の新聞に発表された『掟の前』のチェコ語訳と関係しているとする(Schillemeit 1988, S. 267f.)。これはカフカのかつての級友ルドルフ・イロヴィーの妻ミレナ・イロヴァーによって翻訳されたものであった。カフカは自分の作品をチェコ語に翻訳する権利をミレナ・イエセンスカだけに認めていたので、このことを「私たちの事柄に対する小さな干渉」と不快に受けとめている(MN 284)。それはともかくとして、自分の作品のチェコ語訳が発表されたのに触発されて、書類束Bのような『掟の前』の書き直しを試みたのであろう、とシレマイトは推測している。すると、この断片は10月24日頃に書かれたということになる。

シレマイトによると、この『掟の前』断片は用紙の表頁の冒頭にあり、そのあとに三つの段落をはさんで(その中の一つはプロートによって『小さな寓話』と題された猫と鼠に関する物語である)、『考察』29・2番の鞭打ちのアフォリズムが書かれている(KKN 344)。そうすると、この鞭打ちのアフォリズムも10月24日かその直後に成立した、ということになる。さらにこの用紙の裏側には、「森の道で馬を走らせる騎手」(KKN 345f.)に関する奇妙な作品断片が書かれている。この物語の続きは一枚の用紙ではなく、用紙が切断されて生じた二枚の紙片のうち的一方に書かれている。シレマイトは二枚の紙片をaとbと名づける

が、aの紙片にはこの物語の続き、および同じ内容を書き変えた断片が書かれているが、これらは読めないくらい線で抹消されている。bには、「父は僕を校長のところ連れていった」という記述が書かれているが、これは書類束Bの一部としてプロート版では『田舎の婚礼準備』の巻に掲載されている(H 383)。しかし、紙片aのほうはミレナ宛の手紙にまぎれこんだ。というのは、aの裏には、カフカがミレナに自分が「従事していること」を知らせるために描いたスケッチ、一人の男が杭に縛り付けられて自分で自分を引き裂き、もう一方の男がそれを眺めているという、あの有名なスケッチが描かれているからである(MN 271)。するとこのスケッチ、ならびにそれと一緒に送られた手紙(112番)は、ボルン/ミュラーが考えたように9月のものではなく、10月24日以降に書かれたということになるが、シレマイトはこの手紙を10月24/25日と推定している(Schillemeit 1988, S. 268f.)。

さて、前稿との関係では、鞭打ちのアフォーリズムの成立時期が確定したことが重要である。前稿は、このアフォーリズムはヴェンコフ紙の鞭打ち苦行の記事に触発されて10月3日に成立した、と主張したのであったが(前稿「下」53頁以下)、書類束の位置からするとこのアフォーリズムは10月24日以降に書かれたものであるから、必ずしもヴェンコフ紙の記事を直接のきっかけとはしていないのかもしれない。しかし、カフカが「ヴェンコフ書簡」(121番の書簡で、シレマイトはこれを11月1日と推定している)で、このアフォーリズムを引用したあとすぐにヴェンコフの記事に言及している以上、やはりカフカの心の中ではなんらかの関連はあったと見なければならぬだろう。11月1日の手紙でヴェンコフの記事を思い出しているのだから、10月24日頃にアフォーリズムを書いたときには、当然この記事は記憶に残っていたはずである。

(3) 鏡人セットと告白と嘘セット

次にシレマイトがあげるのは、彼が「鏡人セット」と名づける書類束Aの用紙である。カフカは「怪談集書簡」(116番の手紙、10月20日)で、中国の怪談集の読書について述べたあと、さらに友人フランツ・ヴェルフェルの作品『鏡

人』を最近読んだこともミレナに報告している(MN 283)。シレマイトによれば、書類束 A にある次の記述は、『鏡人』を読んだカフカの感想である(Schillemeit 1988, S. 272ff.)。

嘆きは無意味だ(誰に向かって嘆くのか?)、歓呼は滑稽だ(窓の万華鏡)。そういうことをする人は、明らかにただ祈りの先導者になりたいだけなのである。しかしそうすると、インド的なものは下品である。そこで、嘆きたいのであれば、彼が一生涯「私は犬だ、私は犬だ……」と繰り返し唱えていれば十分で、我々みんなが彼のことがわかるというものだ。ところが幸福に対しては沈黙が十分であるばかりではなく、それだけが唯一可能なことである。(H 331; KKN 333f.)

下線部はプロート版全集では「ユダヤ的なもの(das Jüdische)」となっている。そのためにプロートはこの断片について、「《窓の万華鏡》とはプラハのあるシナゴグの色彩豊かなステンドグラスのことを指しているらしい」という的外れな解説をつけている(H 452)。ところが、シレマイトによれば、この箇所は「インド的なもの(das Indische)」と読むべきであるという。『鏡人』はインドを舞台にして展開される戯曲であり、脚本のト書には万華鏡的な窓という舞台装置に関する指示がある。このことから、シレマイトはこの断片を『鏡人』に関連づけるわけである。

116 番の手紙が 10 月 20 日に書かれたものであるから、カフカがヴェルフェルの戯曲を読み、このようなコメントを書類束に記したのはそれ以前、おそらく 10 月半ばということになるだろう、とシレマイトは考える。この『鏡人』コメントは、用紙の表頁の二番目の記述であるが、その前に書かれている、この頁の冒頭の記述は、別の用紙から続いている別の記述である。この記述は『鏡人』コメントの直前に置かれている「私は私の所有物を取り集めてみた……」(KKN 333)という断片である。この記述の書き出し部分は用紙の裏頁の最後に書かれているが、その同じ裏頁の少し上のほう、最後から三番目(drittletzte)に、次のような記述がある(Schillemeit 1988, S. 274)[10]。

ほんの一言。ほんの一つの依頼。空気のほんの一つの振動。あなたがまだ生きていて、待っていてくれるという、ほんの一つの証明だけでいい。いや、依頼などでない。ほんの一つの呼吸、呼吸ではない、ほんの一つの心構え、心構えではない、ほんの一つの考え、考えではない、ただ安らかな眠りだけでいい。(H 330f.; KKN 333)

この断想の中の「あなた(Du)」をシレマイトはミレナであると考え(プロート版では《du》と小文字で書かれていた)。前稿も指摘したことであるが(前稿「下」109頁以下)、10月の初めにミレナが流感にかかって、カフカのもとに彼女からの手紙がしばらく届かなくなる一時期があった。シレマイトも同じように考えるのであるが、彼はこの記述はそのときのカフカのミレナへの想いであると見る。

さらに、この断想が書かれている用紙の表頁の二番目には次のような記述がある。

君は来るのが遅すぎた。たった今、彼はここにいたのだが、秋には彼はひと所に長くはとどまっていない。暗い、はてしなく広がる野原にひかれて、彼は出てゆく。彼には鳥のようなところがある。彼に会いたかったら、野原に飛んでゆけ。そこに彼はきつという。(H 329; KKN 331)

シレマイトはこの記述を 114 番の手紙(10月6日頃)の次の記述のいわば文学的な継続と見る(Schillemeit 1988, S. 274f.)。

ミレナ、あなたはなぜ一緒に将来のことを書くのですか。そのようなものなどあるわけがないでしょう。それともあるはずがないから、そのことを書くのでしょうか。一度夜のウィーンでちょっとその話が出ましたが、すでにそのときに私は、誰か私たちがよく知っており、会いたくてたまらない人を、二人で探しているような気がしました。その人がいないので、私たちはその人のことをこの上なく美しい名前と呼んだのでした。しかし、返事はありませんでした。どうして彼が返答できたでしょう。だって彼はそこにいなかったからです、どんな遠いところにもいなかったのです。(MN 275f.)

シレマイトは、ミレナの風邪による二人の文通の中断は 114 番の手紙(10月6日)と 115 番の手紙(10月15日)の間に生じたと推定している。そうすると、この鏡人セットもだいたいその頃にかかれたということになる。

シレマイトの以上のような精密な推定によって、少なくとも三つの部分セットについてはその執筆時期がかなり正確にわかった。以上を整理すると、

鏡人セット	10月6日頃から10月半ば
中国セット	10月20日頃
掟の前セット	10月24日頃

ということになる。

シレマイトがもう一つ成立時期を推定しているセットがある。それは「告白と嘘」に関するアフォリズム(KKN 348)が書かれている用紙である。シレマイトは、この記述は 11月1日の書簡(121番 = ヴェンコフ書簡)と関係づけることができる、と述べ、このセットを 11月初めのものと推定しているが、その詳しい論拠は示していない(Schillemeit 1988, S. 301)。彼の推定の根拠はおそらく、ヴェンコフ書簡の冒頭の「私もやはり同じことです。それをあなたに書かなければならない、とよく思うのですが、どうもやっぱり書けないのです」(MN 290)という文章が、「告白と嘘」のアフォリズムと類似していると考えからであろう。しかし、シレマイトのこの推定は間違いだと私は思う。というのは、すでに前稿でも指摘したように(前稿「下」85頁以下)、この「告白と嘘」に関するアフォリズムはむしろ、「伝達不可能なものを伝達する」というテーマを扱っている MN 296 の手紙(ボルン/ミュラー版では 124 番)に関係しているを見たほうがより適切であるからである。シレマイトの推定によれば、この 124 番の手紙は 11月26日に書かれている。そうすると、シレマイトの推定に私の修正を加えて、

告白と嘘セット 11月26日頃

ということになるだろう。

3 . シレマイトの日付推定の誤り

さて、シレマイトは『ミレナへの手紙』を表1のように見事に再構成したのであるが、彼の日付推定で疑問を感じるところが二カ所ある。以下の議論では1920年9月のカレンダーが必要となるが、これは前稿「下」77頁に掲載してある。また、カフカとミレナの手紙のやりとりを俯瞰するために、後に掲載する図1(○○頁)も参照されたい。

最初はシレマイト配列の108, 109, 110番の書簡である。これらはボルン/ミュラー版では126, 107, 94, 108番の四通の書簡に関係する。

シレマイトは、ボルン/ミュラー版では9月14日の107番の手紙の一部とされている261頁の12行目《Ich wage die Briefe kaum zu lesen(手紙を読む勇氣はほとんどありません)》から263頁の10行目《so lebe ich(私はこんなふうに生きているのです)》までを、ボルン/ミュラー版126番の手紙(MN 299-301)の続きと考え、この全体を9月18-20日の手紙としている(Schillemeit 1988, S. 280)。MN 299-301とMN 261, Z.12-263, Z.10をひと続きの手紙と考えることは、シレマイトのあげている理由(文通をやめるというテーマの同一性、ミレナの髪の毛を分けるという同じイメージの出現、そしてMN 261-263がほかの記述を含まない独立した一枚の用紙に書かれていること)によって正当なことである。そしてこの手紙につけられた土曜と月曜という曜日が、9月18日と20日でしかありえないこともシレマイトが言う通りである。

シレマイト配列で次に来る94番は、ボルン/ミュラー版では8月終わりの書簡とされていたが、シレマイトがこれを9月15日以降にもってきたことも正しいだろう。というのは、この手紙は、9月15日(水)の手紙(109番)でカフカが行なっている、ミレナのサナトリウム行きの提案に対する彼女の返事を受けて、同じテーマについてさらに詳しく述べているものと見ることができるからである。さらに、この手紙を9月15日以降のものとするもうひとつの理由がある。シレマイトも言うように、9月15日以降の手紙で、カフカは文通の方法、もっと正確に言えば、文通を秘密にする方法について時々提案を行なっている。たとえば、

ミレナの家にかフカは何も書かない葉書を送り、その葉書が着いたらミレナは郵便局に局留めになっているカフカの手紙を取りに行く、という方法である。このようなトリックは、9月11/12日にミレナがザンクト・ギルゲンからウィーンに帰ってきたあと、二人の文通を、ミレナに再び関心を向け始めた夫エルンスト・ポラクに隠すために必要になったのである。この文通のやり方に関する記述は、シレマイトも言うように、

ボルン/ミュラー版 109 番：「文面のない葉書を送って、郵便局に手紙が着いている、ということを知らせます」(MN 264)

同 94 番：「今度あなたに手紙を書くときは、その知らせとして、葉書の代わりに印刷物もお宅に送ります」(MN 233)

同 110 番：「お願いですから、ミレナ、あなたに手紙を書ける別の方法を考え出してください。嘘の葉書を送るとするのは、あまりにも馬鹿げています。どんな本を送ったらよいのか、それもわからないときがあるのです。しかもその上、あなたが郵便局に無駄足を運ぶということを考えると、我慢できません。どうか別の方法を考え出してください」(MN 269)

同 113 番：「いけません、ミレナ、どうかお願いですから、手紙を出せる別の方法を考え出してください。郵便局へ無駄足を運んだりしてはなりません。あなたの小さな郵便配達屋さん——どこにいるのですか？——にだって、そんなことをさせてはなりません。局員さんだって、よけいな質問をされてはなりません。他に方法が見つからないのであれば、それで我慢するしかありませんが、しかしせめて見つけるだけの努力はしてください」(MN 274)

という順番が最も自然である。そしてこの一連の手紙をシレマイトは、109 番 = 9月15日、94 番 = 9月22/23日、110 番 = 9月25日、113 番 = 10月1日というように推定する。私はこの推定もほぼ正しいと思う。

シレマイト配列で 94 番の次は 108 番であるが、この手紙は内容的に 111 番と密接に関係している。108 番では、「一人での不完全さはいついかなる時でも耐え抜いてゆかなければならないが、二人での不完全さは耐える必要はない」(MN 263)、「それはそうと、そのことはあなたも言っています——《彼らには愛

する力がない》〔チェコ語〕と」(MN 264)という文章があるが、111番には、「ミレナ、あなたが連中について書いたこと、《彼らには愛する力がない》〔同じチェコ語〕ということは、その通りです」(MN 270)、「《二人での不完全さ》というのは、あなたの手紙では誤解されています。そのような言葉で私が言いたかったのは、私が私の汚れの中で生きており、それは私の問題だ、ということ以上ではありません。しかし、その上あなたを引きずり込むというのは、まったく別の事柄です。……ミレナ、あなたが有している罪などは話題にはなっていないのです」(MN 270)という文章がある。このやりとりからうかがわれるのは、「二人での不完全さ」について触れたカフカの108番の手紙に対してミレナが、「二人での不完全さ」は彼女の罪のことも含むものと解釈し、それに対してカフカが111番の手紙で、自分はミレナを罪深いなどとは思っていない、と書いたという経緯である。シレマイトは111番の冒頭につけられた「月曜日晚(Montag abend)」という月曜日は9月27日と考え、108番をその約5日前の22/23日とした。

シレマイトが111番を9月27日とするのは正しい。しかし、108番をその5日前としたのは間違っているだろう。その理由はこうである。

シレマイト配列の全体を見れば、カフカは5月31日の手紙(シレマイト配列11番)から9月18-20日の手紙(シレマイト配列108番)までは、日付こそ書かないものの、ほとんど必ず用紙の冒頭に曜日を記入している。この期間中でも、たまに冒頭に曜日が記入されていない手紙もあるが、そのような手紙でも文中に曜日が記されていたり、内容から曜日がわかるようになっている。これに対して、シレマイト配列(一応正しいと仮定して)の109番の手紙(9月22/23日)以降では、ほとんど曜日が記入されていない。シレマイト配列の118, 120, 122, 126番は曜日がわかる手紙であるが、それは文中に曜日が記されているからであって、冒頭には曜日はない。カフカは9月20日以後、意識的に曜日の記入を放棄したのであろう(ちょうど5月31日以降に意識的に曜日の記入を開始したのと同じように)。そうすると、9月20日以後では9月27日の手紙(ボルン/ミュラー版111番)にだけ《Montag》という曜日が記入されているのは例外的で、いかにも奇妙である。シレマイト自身はこのような曜日記入の問題に気づいていないが、

私は最初シレマイトの日付推定を疑って、この手紙は9月20日以前の手紙ではないかと考えたが、そのような想定は、この手紙の内容がボルン/ミュラー版108番の手紙と密接に関連していることから、成り立たないことがわかった。すなわち、9月27日の手紙111番は108番の内容を受けて書かれているのだから、当然108番より後に来るが、ところがその108番ですでに曜日の記入が放棄されているからである。

次に奇妙なのは、《Montag》のあとにさらに《abend》という時間帯まで記されていることである。シレマイト配列をよく見ると、5月31日の手紙から9月18 - 20日の手紙で、カフカが曜日以外にも《abend》とか《vormittag》とかいう時間帯を示す語や、《später》などという順序を示す付加語をつけるのは、大体が一日に二通以上の手紙を書いたときに、その順番を明示するためであることがわかる。カフカが同じ日の朝、昼、晩に手紙をわけて出しても、ミレナのもとには一緒に届いたり、前後が入れ替わる可能性があるから、順番通りに手紙を読んでもらうためには、こうした順序を示す語も必要になるわけである。カフカは6月12日(シレマイト配列23番)以来、この「曜日+時間帯」という表記システムをかなり首尾一貫して守っている。

それでは9月27日の同じ月曜日に、カフカはこの手紙以前に別の手紙を出したので、この《abend》を付加したのだろうか？ しかし、この手紙を読むと、カフカはこの日は別の手紙を書いていないことがわかる。それではこの

《abend》は何のために必要だったのだろうか？ 同じ疑問は9月18 - 20日の手紙につけられた《土曜日晚(Samstag abend)》にも生じる。カフカは9月18日には、残されている手紙より以前に、日中にも別の手紙を書いたのだろうか？

《Montag abend》の謎は、この手紙(111番)の冒頭部分を読むと解ける。

水曜日にあなたは郵便局に行くが、そこには手紙が来ていない——いいえ、土曜日のが着いているはず。仕事をするつもりだったので、役所では手紙を書けませんでした。ところが私たちのことを考えていたので、仕事もできませんでした。午後にはベッドから起き上がれませんでした。疲れすぎて

いたからではなく、あまりに《重かった》からなのです。いつでも同じこの言葉を使いますが、これが私にふさわしい唯一の言葉なのです。(MN 269)

ミレナはカフカへの手紙を「役所」=労働者災害保険局宛に送り、カフカも頻繁に役所でミレナ宛の手紙を書いた(何という役人だろう!)。カフカの108番の手紙にあった「二人での不完全さ」について言及したミレナの手紙は、月曜日に役所に着いた(あるいは、それ以前にすでに着いていたのだが、カフカのもとに回ってくるのが月曜日になった)。もし、それ以前、ということは日曜日は役所は休みだから、土曜日にカフカがこの手紙を入手していたら、彼は何もすき好んで役所で手紙を書かなくとも、ゆっくりと自宅で書いたはずである。ところが、手紙が月曜日に届いたので、すぐに返事を書こうとすれば役所で書くしかない。それができれば、月曜日の日中に返事を出すことができ、水曜日には手紙はウィーンの郵便局に着くだろう。しかし、役所では「重くて」手紙を書けず、手紙を書くのが夕刻にずれ込んだので、その夜投函しても手紙の集配は翌朝火曜日になり、ウィーンに届くのはたぶん木曜日以降になる。そのことを、つまり自分の手紙(111番)がミレナの期待(予期)よりも遅れた事情を示すために、カフカはあえて《Montag abend》という曜日と時間帯を記入したと考えられる。

このことから、その当時プラハ→ウィーン間の郵便が通常2日間かかったことが明らかになる。それはまた、カフカ→ミレナ→カフカのやりとりが最短でも通例ほぼ5日間隔であることとも合致する(シレマイトがときどき5日間隔を単位としてカフカの手紙を配列するのはそのためである)。こうした郵便事情は何度も手紙のやりとりをしていたミレナもカフカも当然知っていた。それに基づいて、ミレナはカフカが遅くとも月曜日の日中には手紙を出し、自分はそれを水曜日に受け取れるものと予想していた。おそらくミレナは彼女の手紙の中で、「私はあなた〔カフカ〕の返事を受け取りに水曜日に郵便局に行く」と書いていたのだろう。それは文面のない葉書や印刷物を送る代わりに、ミレナがカフカの手紙を受け取るために申し出た方法だったのだろう。それ以外には「水曜日にあなたは郵便局に行くが、そこには手紙が来ていない」というカフカの文章は理解できない。

その場合、水曜日に郵便局に行くと言ったミレナは、彼女の手紙は遅くとも日曜日にはカフカのもとに届き、カフカが日曜日にミレナへの返事を書き、遅くとも月曜日には投函できるものと予想していたに違いない。しかし、日曜日は役所は休みだから、カフカに手紙は届かない。したがって、ミレナは遅くとも土曜日までには自分の手紙が役所に着くように手紙を投函したはずである。とすると、ミレナが手紙を投函したのは遅くとも 22 日(水)の夜か 23 日(木)の朝ということになる。ところが、何かの事情でミレナの手紙が土曜日にはカフカのもとに届かなかった(第一次世界大戦後の社会混乱が残っている時代には、郵便が遅れることは珍しいことではなかった。カフカのもとに、ミレナが木曜日、金曜日、土曜日に出した手紙が一緒に着いたこともあった[MN 104])。もしミレナのその手紙が届いていれば、すでに土曜日のカフカの手紙(ボルン/ミュラー版 110 番)で「二人での不完全さ」について言及されていたはずであるが、土曜日の手紙にはそのような記述はない。そうしたミレナからの手紙の落手の遅れを示すためにも、カフカとしてはこの時期もう曜日の記入を放棄していたにもかかわらず、自分の手紙が遅れた事情を説明する冒頭の文章とともに、この手紙にだけは例外的に「月曜日晚」という曜日および時間帯を記したものと考えられる。

さて、ミレナが 22 日の夜、あるいは 23 日の朝までにカフカ宛の手紙を出せるためには、彼女はカフカの 108 番の手紙をそれ以前に入手していなければならない。しかしそのためには、カフカは 108 番の手紙を遅くとも 20 日(月曜日)中には出していなければならないだろう。シレマイトが考えたように、9 月 22/23 日にカフカがこの手紙を書いたのであれば、ミレナはとうてい次の週の水曜日に 111 番の手紙を入手できると予想しえない(つまり、ミレナが水曜日に郵便局に行くはずがない)。したがって、108 番を 22/23 日とするシレマイトの推測は日程的に見て成立不可能ということになる。

次に、シレマイトのこの推定は、手紙の内容の面からも矛盾を引き起こす。すでに見たように、彼は 94 番の手紙も 9 月 22/23 日と推定している。つまり彼は、9 月 22/23 日という同じ日に、この 94 番が発送されたあと、108 番の手紙が出されたと考えるのであるが、それは 108 番の冒頭に、

あなたの手紙が着いたときには、最初の手紙はもう出してしまっていました。その中に何があるかと——その中には「不安」などがあるのですが——、そしてそれに対して吐き気を感じるのは、それが吐き気を催させるものであるからではなく、私の胃が弱すぎるからなのですが、それら一切を別にして、問題はあなたが言うのよりもっと簡単なのかもしれません。

(MN 263)

とあるように、108番のこの文面は、同じ日に二通の手紙が出されたことを示しているからである。ところが、この「最初の手紙」を94番の手紙、すなわちカフカがミレナに対してサナトリウム行きを提案する手紙と解釈することはできない。というのは、94番はサナトリウム行きに要する費用やミレナの父の援助額などといった具体的な数字をあげているだけで、しかもその最後近くには、「告白しますが、再びあなたの力強い近くで呼吸するという幸福のあまり、あなたのことをほとんど考えません」(MN 233)と、カフカが再び感じ始めた幸福感については書かれているが、108番にある「不安」については少しも言及されていないからである。つまり、108番にいう「最初の手紙」を94番と考えることはきわめて不自然である。

私の推定によれば、すでに述べたように、108番は9月20日に書かれたと考えることができる。すると、108番で言及されている同じ日に出した「最初の手紙」は、94番ではなく、シレマイトが9月18-20日とした手紙ということになる。私のこの推測は内容的な矛盾を引き起こさないであろうか？ 18-20日の手紙は全体としてカフカの苦悩の色がきわめて濃く、カフカはミレナとの文通をやめて、安らかに眠りたいだけだ、と述べている。そしてMN 261以下では、「〔あなたに手紙を〕書かないときは、私はただ疲れて、悲しく、重いのです。書くと、動揺と不安に引き裂かれます」(MN 261)とか、「必然的に《不安》についての話が出ることになり、必然的にこれが繰り返されることになりました。これこそむき出しの神経にさわるように、私を(そして罪もないのにあなたまでも)苦しめてきたものなのです」(MN 262)と不安について語られている。つまり、108番にいう「最初の手紙」はまさに18-20日の手紙であると考えたほうが自

然である。

また、108番の最後には、「それはそうと、そのことはあなたも言っています——《彼らには愛する力がない》と。これも《獣》と《人間》を分けるのに十分な区別ではないでしょうか？」(MN 264)という一節があるが、これは9月18 - 20日の手紙(MN 261-263)でカフカが自分を暗闇に棲む獣にたとえていることを引き合いに出している。これらのことから、不安について語られる9月18 - 20日の手紙(=最初の手紙)が出されたあと、ミレナから「二人での不完全さ」について述べた別の手紙が届き、それに返答すべくカフカは108番の手紙を書いた、と考えられる。したがって、108番は9月20日月曜日に書かれたという私の推定は、内容的に見てもシレマイトの推測よりもはるかに妥当である。

さて、カフカ→ミレナ→カフカのやりとりが、両者が相手の手紙にすぐに返事を書けば、通常5日間隔であることを考慮すると、108番のきっかけとなったミレナの手紙、つまり9月20日にカフカが「最初の手紙」を出したあとに着いたミレナの手紙は、カフカの9月15日の手紙に対する返答であったろう。つまりカフカの側では、9月15日(109)→20日(108)→27日(111)という内容的に関連した一連の手紙の流れが考えられる。カフカの9月15日の手紙は、文通をやめることのほかに、カフカがミレナの父ヤン・イエセンスキー教授の助手ヴラストのところで行なった行為の説明と弁明、そしてミレナのサナトリウム行きの件などが語られている(カフカの申し出を受けて、ヴラストはミレナがウィーンに戻る以前に、ミレナの父親の意向を伝える手紙をウィーン宛に出していた。カフカは、「あなたは〔ウィーンに着いていたはずの〕ヴラストの手紙のことには触れていません。彼女は父上の名において、数カ月の間、あなた自身で選んだ(ただしチェコスロヴァキア内にある)サナトリウムに行くように、という提案をしたのです」[MN 264]と書いている)が、ミレナは9月15日の手紙への返答では、彼女自身のサナトリウム行きの件については、何も触れなかったのだらう(触れていれば、108番にそのことが書かれていたはずだ)。つまり、ミレナはこの手紙では、カフカが文通をやめようと言い出して、重大な危機を迎えている両者の関係、自分のサナトリウム行きの件などよりはるかに重要と考える件についての

み緊急に書いてきたのである。これに応じて、カフカの15日→20日→27日という手紙の流れでは、二人の関係とカフカの内面の問題が主題であり、ミレナのサナトリウム行きの問題は触れられていない。

しかし、すでに9月15日の手紙で、ヴラストの提案について何か返答するように、とカフカに要求されていたのだから、彼女はおそらくそのすぐあとに、サナトリウム行きという彼女の問題についての手紙を、別便でカフカに書き送ったに違いない。その手紙は9月21日以前にカフカのもとに届いたはずであるが、それに対するカフカの返答がボルン/ミュラー版94番の手紙であろう。シレマイトはこの手紙を9月22/23日としているが、この推定はほぼ正しいであろう。

ついでに、9月18日の手紙につけられた土曜日「晩」という時間帯の表示についてもここで説明しておこう。この手紙の冒頭には、「黄色の手紙はまだ受け取っていません。開けずに送り返すことにします」(MN 299)という一文が書かれている。このことから、ミレナがカフカに電報を打って、彼女が出した「黄色の手紙」を読まないまま送り返してほしい、と要求したことがわかる。この場合の「晩」も、この手紙がこの日の二通目であることを示すためのものではなく、カフカが役所ではミレナが電報で知らせてきた「黄色の手紙」をまだ受け取らず、そのまま家に帰って、夕刻自宅でこの手紙を書いている、ということを示すためのものであろう。この手紙は次には「月曜日」という曜日が記され、そして、「この手紙は送らずに、破いてしまおうと思っていました。電報にも答えまい、と考えていました。電報というものはいつでも色々な意味に解釈できます。しかし、そこへ葉書と手紙が届きました。この葉書とこの手紙です」(MN 300)とある。役所に「黄色の手紙」と葉書が届いたわけである。この「黄色の手紙」の内容についてはあとで考えることにしよう。

次に、私がシレマイトの日付推定で疑問を感じる第二の箇所は、114番の手紙である。表1で9月25日以降のカフカの手紙の配列は110番(9月25日)、111番(9月27日)、113番(10月1日)、114番(10月6日)であるが、この順番自体は正しいだろう。これらの手紙の中で、110番と113番は内容的に密接に関連

している。110 番には「これは突発です。それは過ぎ去るものですし、一部はすでに過ぎ去っています」(MN 267)とあるが、113 番には「それが過ぎ去るだろうということを、私が知っていたかというのですか？ それが残るだろうということを、私は知っていたのです」(MN 273)と書かれている。この二通から、ミレナは 110 番に書かれていた「突発」について質問し、カフカは 113 番の手紙でそれに答えたことがうかがわれる。つまり、110→ミレナ→113 という関連があるわけである。カフカ→ミレナ→カフカのやりとりは通常 5 日間で行なわれるので、113 番を 10 月 1 日頃とするシレマイトの推測は正しいだろう。そうすると、111 番と 114 番についても 111→ミレナ→114 という関連が考えられるのであるが、シレマイトの日付推定ではこの二通は 9 月 27 日と 10 月 6 日で、間隔があきすぎているように思われる。

シレマイトが 114 番を 10 月 6 日と推定したのは、114 番にある「あなたがまたもあんなに素晴らしく翻訳してくださったのに、私は《クメン》と《トリブナ》にまだお礼さえ言っていない」(MN 277)という箇所のためである。「クメン」と「トリブナ」というのは、チェコ語の雑誌や新聞にミレナが発表したカフカやトルストイの翻訳のことを指している。ミレナのこれらの翻訳の中で最も時期があとのもは、日刊紙トリブナに 9 月 26 日(日)に発表された『あるアカデミーへの報告』である[11]。シレマイトは、これらの翻訳を入手するにはある程度の時間がかかったであろうから、114 番の手紙は 10 月 4 日(月)以前には書かれなかったであろう、と言い、そして、114 番を 113 番(10 月 1 日)から 5 日間隔で 10 月 6 日と推定した(Schillemeit 1988, S. 272)。しかし、私には、カフカが日刊紙に発表された『あるアカデミーの報告』のチェコ語訳を読むことが、そんなに遅くなったとは考えられない。カフカはチェコ語がかなりできて、ミレナからの手紙もチェコ語で書かれていたし、チェコ語の新聞や本もよく読んでいたから(たとえばヴェンコフ紙など)、トリブナ紙に出た自分の作品の翻訳はすぐに見つけたはずである。それに 113 番から 5 日後というのは明らかに間違った推定である。5 日というのは 113→ミレナ→114 という手紙の連関があるという前提に基づいている。しかし、カフカの書簡からはこういう内容的な連関は読み

取れない。それに110→ミレナ→113という連関もあるが、これと合わせると、カフカの側では110→113→114という手紙の系列ができるが、その場合111番が宙に浮いてしまうことになる。

113→ミレナ→114という系列が成り立たないことは、夢の記述がある113番の手紙をミレナが「幽霊の手紙」と呼んだのが、流感が直ったあとに出した手紙115番の中であることから明らかになる。もし、113→ミレナ→114という系列があったならば、カフカの115番(10月15日)ではなく、すでに114番に「幽霊の手紙」というチェコ語が出現していたはずである。だが114番には113番の内容が反映されていないから、114番を113番の5日後と考える必要はない。

これに対して、内容的には111→ミレナ→114という関係が読み取れる。111番には「現在のことについて何も言えないのですから、いわんや将来のことにおいておやです」(MN 269)とあるが、114番には「ミレナ、あなたはなぜ一緒に将来のことを書くのですか？ そのようなものなどあるはずはないでしょう。それとも、あるはずがないからそのことを書くのでしょうか？」(MN 275)と書かれている。すなわち、ミレナが二人の将来のことについて書いてきたのに対して、カフカは111番で、将来のことなどわからない、と答えたのであるが、ミレナはあくまでも将来二人で共同生活を営みたいという希望を伝えてきた。それに対してカフカは、114番で「一緒に将来などあるはずはない」と、将来の共同生活の可能性を再び否定したのである。111番と114番の間がほぼ5日間とすると、114番が書かれたのは10月2日あるいは3日ということになるだろう。この場合、鏡人セットの執筆時期も若干ずれる。それはこれまでの議論を基本的にくつがえすことにはならないが、カフカがミレナからの手紙を受け取らなかった期間は、シレマイトの推定よりももっと長かったことになる。

以下には、シレマイトの推定を若干修正した私の日付推定を、表2として示しておこう(1920年9月15日～10月15日分)。

表 2

記号の説明：

N = 中澤による書簡の順番，Datum(N) = 中澤による日付，その他の記号は表 1 と同じ。

N	Datum(N)	Seite	曜日(K)	S	Datum(S)	B/M
107	15.9.	264-266	Mittwoch	107	15.9.	109
108	18.-20.9.	299-301 261(Z.12 から)-263	Sa. abend-Mo.	108	18.-20.9	126 107
109	20.9.	263-264		110	22./23.9.	108
110	22./23.9.	233(Z.1-25)		109	22./23.9.	94
111	25.9.	266-269		111	25.9.	110
112	27.9.	269-271	Montag abend	112	27.9.	111
113	1.10.	272-275	夢の手紙	113	1.10.	113
114	2./3.10.	275-278		114	6.10.	114
115	15.10.	278-281	幽霊の手紙書簡	115	15.10.	115

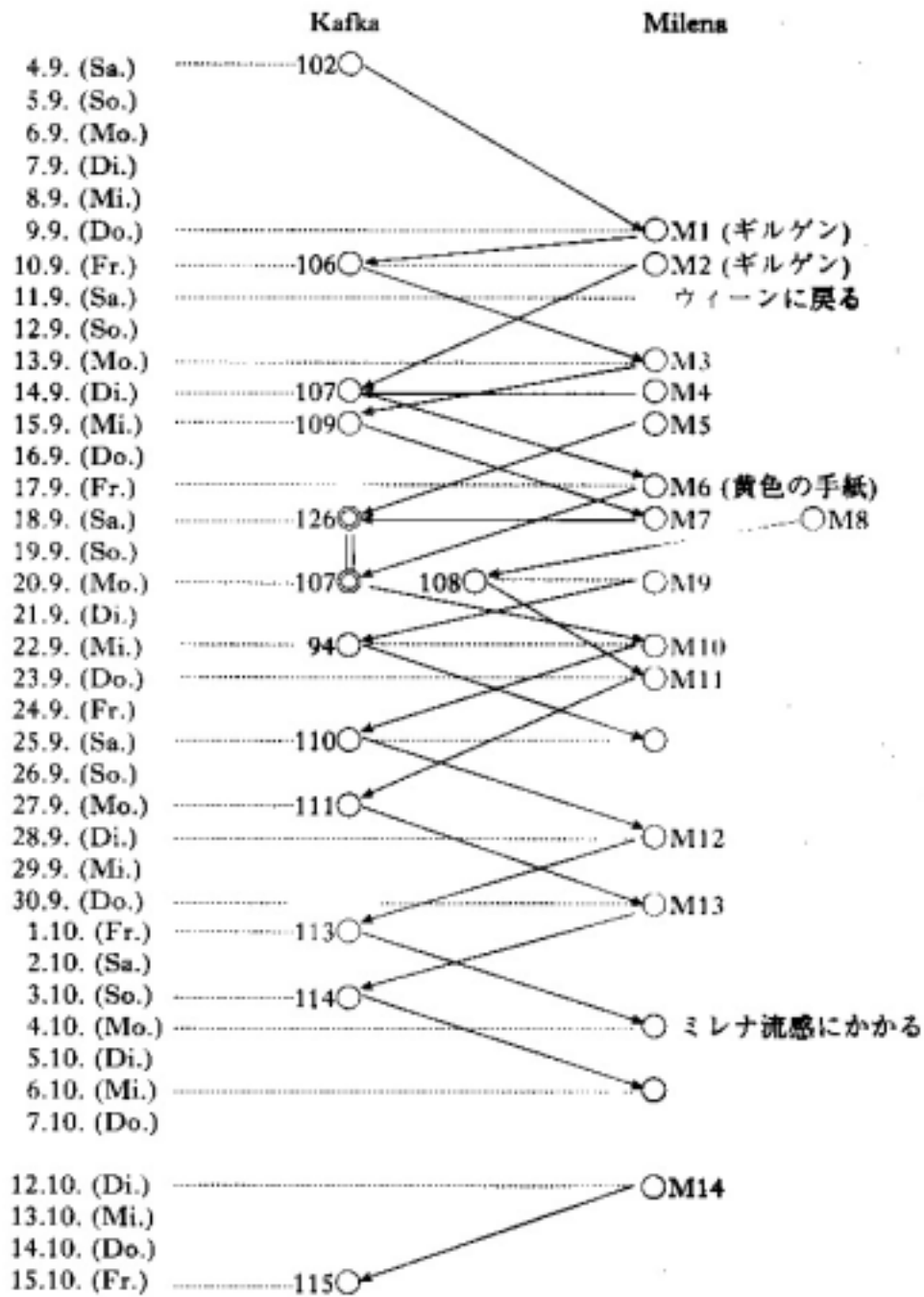
4 . 9 月 15 日以降の再接近の局面

シレマイトの以上のような書類束を視野に入れた『ミレナへの手紙』の新しい日付によって，9月初め以降のカフカの心の動きがより鮮明にわかってくる。以下では両者のやりとりをわかりやすくするために，図 1 を作成した。102，106 等はボルン/ミュラー版の番号であり，M 1，M 2 等はミレナが書いたと思われる手紙や電報である。これらは残されていないから，その存在についてはカフカの手紙から推測するほかはないので，日付は当然前後 1，2 日のずれを含んでいるものと考えられたい。

カフカは経済的苦境と健康状態の悪化を訴えるミレナの手紙にいたく心を痛め，9月3日(金)にヴラスタを訪れ，ミレナがサナトリウムに行けるように，ミレナの父の援助を申し込んだ(このことを 102 番の手紙でザンクト・ギルゲンにいるミレナに報告)。しかし，これは父からの独立を目指していたミレナには，いらぬおせっかいと思われた。申し出を即刻取り消すように要求する彼女の怒りの電報(M 1)に打ちのめされて，カフカは9月10日にこう書いた(106 番)。

図 1

9月初め～10月中旬の交通



ちょうどあなたの電報が着きました。あなたのおっしゃることは完全に正しい。私はどうしようもなく愚かに、そして粗野に振る舞いました。しかし、それも仕方のないことでした。というのも、私たちは誤解の中で生きているからです。私たちの答えによって、私たちは私たちの問いの価値を下落させているのです。私たちは今やお互いに手紙を書くことをやめ、将来のことは将来にまかせなければなりません。(MN 258f.)

これに対してミレナのほうは、感情の爆発にまかせてカフカに厳しい電報を打ったことを後悔して、そのすぐ翌日に彼に謝罪の手紙二通と絵葉書を送った(M 2)。この間、ミレナは9月 11/12 日の週末にザンクト・ギルゲンからウィーンに戻った。彼女はさっそく、自分がウィーンに戻ったことを知らせる手紙を書いた(M 3)。ここでもミレナはカフカに対し和解的な言葉を書いたと思われるが、彼女としては自分の電報がカフカにとってそれほど大きな打撃になるとは想像していなかった。この手紙では、彼女はウィーンに着いていたヴラスタの手紙については無視して、一切言及しなかった。

9月 14 日：そこにカフカの 106 番の手紙が、おそらくザンクト・ギルゲンから転送されて到着した。文通をやめようという内容に驚いて、ミレナはただちに電報(M 4)によってさらに謝罪し、カフカのヴラスタ訪問に感謝した。電報 M 4 に続いて翌日には、いま文通をやめることはお互いにとってよくない、ということ詳しく論じた手紙を書いた(M 5)。

この日、カフカのもとには最初ザンクト・ギルゲンからの M 2 の手紙と絵葉書が着いた。「今日は手紙が二通、それに絵葉書が届きました。ためらいながら封を切りました。あなたは不可解なくらい善良な人であるのか、あるいは不可解なくらい自制しているのかのどちらかです。すべては前者の証左となっていますが、後者の証左となっているものも二、三あります。繰り返して言いますが、あなたは完全に正しかったのです……」(MN 259)。その後、さらに M 4 の電報が着く。「いま電報も着きました。本当ですか？ 本当ですか？ そして、もう私をたたいたりしないというのでしょうか？ 違います、あなたがそのこと〔カフカのヴラスタ訪問〕をうれしく思うことなどできないはずです。そんなことはあり

えません。前の電報と同じように、これもその場かぎりの電報です。どちらの電報にも真実はありません」(MN 261)。このカフカの手紙は 107 番。

9月15日：さらに翌日には、ミレナがウィーンから出した和解的な内容のM3がカフカのもとに着く。これに対するカフカの109番の手紙――

それを禁ずる法律があるわけではありませんから、もう一度あなたにお書きして、この手紙に感謝いたします。その中には、あなたが私に書いてくださった中でおそらく最も美しい言葉が書かれています。それはこの《私は知っています、あなたが私を……》という言葉です。

そのほかの点ではしかし、私たちはもはやこれ以上互いに手紙を書くべきではない、ということは、もう長いこと私たちの一致した意見となっていました。これを私のほうから口にしたというのは、単なる偶然にすぎません。あなたもまったく同じようにそう言うことができたはずです。私たちが同意見である以上、なぜ書かないほうがよいのか、その理由を説明する必要はないわけです。

困ったのはただ、そうすると私が(今後はもはや郵便局で問い合わせたりしてはなりません)あなたに手紙を書く可能性がなくなる、ほとんどなくなる、ということです。あるいはあるとしても、文面のない葉書を送って、郵便局に手紙が着いている、ということを知らせるだけです。あなたのほうは、何かその必要があれば、私にいつでも手紙を書いてください。しかし、それは自明のことです。(MN 264. アンダーラインはカフカ)

前稿では私はこの手紙を文通の打ち切りを宣言する手紙と解釈したのであったが、「これを私のほうから口にしたというのは」という文章は、カフカが「私たちは今やお互いに手紙を書くことをやめ、将来のことは将来にまかせなければなりません」と書いた9月10日の106番の手紙に言及しているものと見たほうがより適切だと思う。

この手紙には微妙に揺れ動くカフカの心が現われている。彼は一方においてあくまで文通の中止を口にしながら、他方において、矛盾といえば矛盾なのではあるが、ミレナからの手紙を期待している。「あなたのほうは、何かその必要があれば、私にいつでも手紙を書いてください」という、カフカ自身がアンダーラ

インを引いた文章は、カフカの矛盾した願望を示している。彼はおそらくミレナの度重なる謝罪の手紙や電報(M 2 , 3 , 4)によって、態度をかなり軟化させたのである。

9月17日：カフカの107番の手紙がミレナのもとに着くが、これに対してミレナはM6の手紙＝「黄色の手紙」を書く。これは107番のミレナがカフカを「たたいた」という内容や、「前述のことすべてを罪になる仕方で行ったのだ、と私が考えれば、それこそ全体が理解できなくなります。それなら私がたたかれたのも当然ということになるでしょう。しかし違うのです。私たちは両方とも罪があるし、どちらにも罪がないのです」(MN 259f.)、さらには「前の電報と同じように、これもその場かぎりの電報です。どちらの電報にも真実はありません」という表現に反発して、ミレナが再びカフカの非を分析するような内容であったと考えられる。しかし、その後で、彼女は厳しい言い方を反省して、それを詫げる葉書も書いた。

9月18日：再度文通の中止に言及する109番の手紙がミレナのもとに着いた。ミレナはこれ以上カフカを追いつめると、二人の関係が完全にこわれると心配し、前日に厳しい内容の「黄色の手紙」を書いたことも後悔して、それを開封しないで送り返してくれるように、という電報M7を打った。同時に、再び和解的な内容の手紙M8を書く。

カフカはM5の手紙(これはすでに1,2日前に着いていただろう)とM7の電報に触発されて、ミレナとの文通を中断しなければならないという考えとミレナへの愛情の間で心が引き裂かれ、土曜日の夜に126番の手紙を書く。「黄色の手紙はまだ受け取っていません。開けずに送り返すことにします。文通をいま止めることがよくないということであれば、私はひどい思い違いをしているに違いありません。しかし、ミレナ、私は思い違いをしてはいません」(MN 299)。

9月20日：月曜日にM6の手紙(黄色の手紙)と葉書がカフカのもとに着く。カフカはミレナの電報での要請の通り、最初は「黄色の手紙」を開封しないでそのまま送り返そうと考えていたのだが、考えを変えて開けて読む。「手紙を読む勇気はほとんどありません。切れ切れに読むのがせいぜいで、読むときの苦痛に

耐えられません。ミレナ，—そして私はまたあなたの髪を両脇に分けて言うのですが—，私はそんなに悪い獣なのでしょうか？私に対しても悪く，それとまったく同じようにあなたに対しても悪いのでしょうか？あるいは悪いものは，私の背後にあって，私を駆り立てている，と言ったほうが正しくはないのでしょうか？しかし，それが悪であるという勇氣さえ，私にはありません。あなたに書いてあるときだけ，そう思われてきて，そう言うのです」(MN 261)と，カフカは自分の非を言いたてるミレナの手紙に激しい苦痛を感じる。彼は自分を「森の中の汚らしい獣」にたとえて，恋愛全体を回顧する(MN 261 Z.12 以下)。

カフカがこの苦渋に満ちた手紙を出した直後，和解的な内容のM 8の手紙が着き，これへの返事として彼は108番を書く。彼は前便で自分の中の苦悩を全部吐き出した形で，それはいわばカタルシスになったようである。彼は前便のあまりにも自虐的な内容を恥ずかしく思う。「あなたの手紙が着いたときには，最初の手紙はもう出してしまっていました。その中に何があるかと—その中には《不安》などがあるのですが—，そしてそれに対して吐き気を感じるのは，それが吐き気を催させるものであるからではなく，私の胃が弱すぎるからなのです。それら一切を別にして，問題はあなたが言うのよりもっと簡単なのかもしれません。たとえばこんなことです—一人での不完全さはいついかなる時でも耐え抜いてゆかなければならないが，二人での不完全さは耐える必要はないのだ，というようなことです」(MN 263)。

同じ日ミレナのほうは，両者の決裂のきっかけとなった自分のサナトリウム行きについて，ある程度カフカの意見を尊重するという内容の手紙M 9を書く。この手紙の中でも，ミレナはカフカに謝罪し，機嫌を直すように頼む。

9月22日：このM 9の手紙がカフカのもとに着く。彼はヴラスタを訪ねた自分の行動がミレナに正しく評価されたものとして，また度々のミレナの謝罪の手紙に態度を和らげ，彼女と和解することにする。「告白しますが，再びあなたの力強い近くで呼吸するという幸福のあまり，あなたのことをほとんど考えません」(94番)。

この日，土曜日から月曜日にかけて書いたカフカの自虐的な手紙がミレナのも

とに着く。この中のカフカの深刻な苦悩の調子は、ミレナにとっては理解不可能なものであった。彼女はカフカの内面の動揺を、彼の以前の婚約破棄のときと比較する。そして同時に、カフカは以前、自分を捨てないでくれとミレナに書いてきたのに、今度は自分から文通をやめようと言い出すのはおかしいのではないかと書く(M10)。

9月23日：108番の手紙がミレナのもとに着く。彼女は手紙にあった「二人での不完全さ」という表現について、自分にも罪があったと謝罪する(M11)。

9月25日：M10の手紙がカフカのもとに着く。それに対してカフカは110番の手紙で、

あなたは、ミレナ、何が問題になっているのか、あるいは部分的には何が問題になっていたのか、それがよく理解できないのです。私も自分でもわからないほどです。私は突発のもとでおののき、気が狂うほど身をさいなんでいるのです。しかし、それが何であり、それが遠方において何を望んでいるのか、私にはわかりません。それが近くで望んでいるものしかわかりません。それが静寂、暗闇、身を隠すことだということはわかっています。私はそれに従わざるをえませんし、他にどうしようもないのです。

これは突発です。それは過ぎ去るものですし、一部はすでに過ぎ去っています。しかし、この突発を呼び起こす力は、絶えず私の中で震動しています、突発の前でも、後でも。そうです、私の人生は、私の存在は、この冥府の脅迫によってできあがっているのです。……それを撤回して、それは過ぎ去りました、また新しく一緒になれて、私は静かで、幸福で、感謝しているだけだ、などと言うことはもちろんできません。それはほとんど真実ではありますが、言うてはならないことなのです。(MN 266)

と書く。カフカは、「突発」はまだ完全に過ぎ去ったわけではない、ミレナとまだもとの鞘におさまったわけではない、と言って、その前に出した94番の手紙に留保を付けているわけである。ミレナが今回のことを以前の婚約破棄のときと比較したことに対しては、

あなたは何回かの婚約のことやそれに類することに触れていますが、確かにそれは非常に簡単なことでした。苦痛は簡単ではありませんでしたが、

その結果は簡単でした。それはこんな具合でした。ふしだらな生活を送っていたところ、すべてのふしだらさに対する罰として突如逮捕され、頭を万力の間挟まれる仕儀となり、一つのねじが右のこめかみに、一つのねじが左のこめかみに当てられ、二つのねじがゆっくりとしめつけられてゆく間に、「はい、私はこれからもふしだらな生活を続けます」か、それとも「いいえ、こんな生活はやめます」か、そのどちらかの答をしなければならぬのです。そこでももちろん、肺臓が破裂するほど「いいえ」をほえたてたわけでは

あなたが私の今回したこと〔文通をやめようと言いだしたこと〕を、昔のことと同列に置くのも、正しいことです。なぜなら私はいつでも同じ人間でしかありえないし、同じことしか体験できないからです。違っているのはただ、今では経験を積んでいて、ねじに挟まれて告白を強制されてからわめくような真似はせず、ねじをもってきただけで叫び始める、いや、遠くで何かが動いただけでもう叫ぶ、ということです。(MN 267f.)

同じ日にミレナのもとには、彼女のサナトリウム行きについて詳しく説明し、カフカの幸福感をつける 94 番の手紙が着く。彼女はこれによってカフカとの和解が成し遂げられたものと思い、この手紙に対しては直接答えていないようだ。

9月27日：M11の手紙がカフカのもとに着く。これに対してカフカは111番の手紙で、「二人での不完全さ」というのはミレナの誤解だ、と言う。そして同時に、「この前の手紙〔110番〕で昔のことと色々比較したのは間違いでしたし、ひどく後悔しました。このことはお互いになかったことにしましょう」(MN 270f.)と書く。

9月28日：110番の手紙がミレナのもとに着く。これに対してミレナは、「その突発は過ぎ去るものか」と尋ねる(M12)。

9月30日：「このことはお互いになかったことにしましょう」というカフカの111番の手紙、およびそれ以前に着いていた94番の和解の手紙に触発されて、ミレナは再び二人の将来について肯定的な希望を述べる(M13)。

10月1日：M12の手紙がカフカのもとに着く。この手紙に対してカフカは113番の手紙で、「それが過ぎ去るだろうということを、私が知っていたかとい

うのですか？ それが過ぎ去らないだろうということを、私は知っていたので
す」と答える。

10月3日：前日の土曜日にM13がカフカのもとに着く。カフカはミレナが二人の将来の共同生活の可能性についてあまりに楽観的な希望を述べるので、114番の手紙で「ミレナ、あなたはなぜ一緒に将来のことを書くのですか？ そのようなものなどあるはずはないでしょう」と釘を刺す。彼はもちろんミレナが自分を「たたいた」ことは赦したのではあるが、完全にもとの関係に戻ることはまだ躊躇を感じているわけである。

10月4日、6日：カフカの113番、114番の手紙がミレナのもとに着くが、ミレナは流感にかかって、これに対して返事を書くことができない。

カフカは9月10日の電報によって、ミレナとの関係に重大な疑念をいただいたのであるが、しかし、その後の彼女の度々の謝罪や和解の手紙によって、彼女との関係を修復する気持ちもかなり強くなっていたと思われる。関係の破棄と修復という二つの選択肢の間であって、彼は表向きは文通の中断を言い出しながら、彼女に手紙を書ける方法を求めてもいる。こうした揺れ動く心境の中で、私の日付推定の図1によれば、彼は10月初め以来10日間以上もミレナからの手紙を受け取らなかった。度々文通の中止について言及し、しかも直前の114番で「一緒に将来などあるはずはない」と断定的に書いたカフカとしては、これによってミレナが自分との関係を完全に絶ったものと誤解した。ミレナと和解し始めていたカフカは、文通の突如の断絶に深刻な衝撃を受けたに違いない。

ミレナは病気から回復するとさっそく手紙M14を書いたが、この手紙は10月15日にカフカのもとに着いた。その中で、彼女はカフカの113番の手紙に触れ、それを「幽霊の手紙」と呼んだ。これに対してカフカは同日の115番の手紙の中で、「あなたは私にもう手紙を書かないだろう、と私は確信していました。しかし、そのことを私は驚きもしなかったし、悲しみもしませんでした。悲しくなかったのは、それがあらゆる悲しみをこえて必然的なことに思われたからであり、そして世界中に私の貧弱な重量を持ち上げるに足る十分な重量がなさそうだからです。そして驚かなかったのは、たとえそれ以前にあなたが、《これまであなた

に親切にしてあげましたが、もうそれはやめて、あなたから離れてゆきます》と言ったとしても、本当は驚かなかったからです」(MN 278)と書いているが、これが強がりの嘘であったことは、鏡人セットに書かれた彼のミレナへの想いに示されている。彼にはミレナに引かれる部分がまだかなり残っていたからこそ、10月上旬の文通の中断は、カフカのほうから文通をやめようと言い出していたにもかかわらず、彼にとっては大きな打撃になり、彼は書類束に、「ほんの一言。ほんの一つの依頼。空気のほんの一つの振動。あなたがまだ生きていて、待っていてくれるという、ほんの一つの証明だけでいい……」というミレナへの想いを書き記すことになったのである。しかしまた同時に、しばらくミレナから手紙が来なくなったことにより、この間に彼がこの恋愛関係について根本的な反省を行ない、その終了をはっきり意識し始めたことも確かで、この手紙にはそうした終わりの意識も現われていると言えよう。

シレマイトは9月15日以降の時期を、正当にも「ためらいがちな再接近の局面」と呼んでいる(Schillemeit 1988, S. 298)。このような再接近の気配の中で、カフカは9月15日から書類束Aに「日付+アフォーリズム」の記入を開始しているのであるが、この時期は、カフカの内面でミレナへの幻滅と愛情が、この恋愛を断念しようとする意志とそれを継続しようとする意志が、あい拮抗し、あい戦いあっていた時期ということになるだろう。このような葛藤の中で、彼は自分自身の本性を究め、この恋愛の行方を定めるために、アフォーリズムという自己省察形式を取ることを決意したものと思われる。こうして書類束Aは一時「日付+アフォーリズム」という八折判ノートG, Hと同じ形式を取ったが、今回はフェリスの時のように恋愛関係が完全に終了していなかったため、それも中途半端な形になり、彼は再び文学的創作活動のほうに戻って行ったのである。

5. 『考察』の編集とミレナ体験

以上のような1920年のカフカのミレナとの関係を念頭に置き、カフカがこの年に『チューラウ・アフォーリズム』にいかなる態度を取ったかを、前稿を修正し

つつ以下でまとめてみよう。

(1) 『考察』の編集時期

これまで一般的に、カフカはチューラウでは八折判ノートにアフォーリズムを書いただけで、紙片への清書は行なわなかった、と信じられてきた。前稿はその見解を引き継ぎ、1920年にミレナとの関係が危機を迎えてから、本格的に『考察』の編纂にとりかかったと考えたが、原典批判版におけるシレマイトの紙片原稿の調査によって、カフカがすでにチューラウで紙片を作成していたことが明らかになった。当然のことではあるが、最初これには1920年の書類束に書かれた新しいアフォーリズムは記入されていなかった。それが追記されたのは1920年になってからであるが、そのことは追記されたアフォーリズムと古いアフォーリズムとの書体の相違によって確認することができる(KKN A 49)[12]。

シレマイトによれば、紙片への清書作業は次のような過程で行なわれた。カフカは最初に筆写用の紙片を作成し、その右肩に番号を打った。つまり、最初にアフォーリズムを紙片に書き出して、そのあとからそれに番号をふったのではない(紙片のアフォーリズム・テキストの一行目の終わりの位置が数字の位置にそろえられていることから、そのことが推定される)。次に、そのようにして作成しておいた紙片に、八折判ノートGとHから適当なアフォーリズムを選んで書き写した(その際推敲が行なわれた)。この選抜作業は八折判ノートGの前の方から順番に進められた(KKN A 50f.)。

プロート版全集において、一つのアフォーリズムに二つの番号が与えられていた箇所 = 二重番号アフォーリズムがあったが、それは11/12, 64/65, 70/71の三篇とされていた。ところが、原典批判版では二重番号アフォーリズムは8/9, 11/12, 70/71の三篇である。二重番号は、何らかの理由で生じてしまった番号の欠如を埋めるために、紙片への書き写しのあとで、カフカ自身がもとの番号に付加して作った番号である(つまり、8番の紙片に数字9を書き加えてある)。また、プロート版全集では、7番と8番、9番と10番はもとの八折判ノートでは一連のアフォーリズムであるにもかかわらず、『考察』では二篇に分割されていたが、原典

批判版ではこのような「分割アフォーリズム」は存在しないことが明らかになった。このような分割アフォーリズムは、アフォーリズム集の番号の欠落を埋めるためのプロートの工作であった(ところが104番の欠番はそのままに放置されている。改ざん作業も首尾一貫していない)。

プロート版全集では、104番だけが欠番になっていたが、原典批判版では65番と89番が欠番である。65番はプロート版全集では64/65という二重番号アフォーリズムであったが、実はこのような番号の紙片は存在しない。プロートが65番の欠番を補うために、64番を二重番号アフォーリズムに変更したのである。また、プロート版で89番のアフォーリズムは例の自由意志に関するアフォーリズムであるが、このアフォーリズムの書かれている用紙は、右肩の数字を記入した場所が取れてしまって、そのために——カフカ自身によってか、プロートによってか——誤って89番にされてしまったのだろう、とシレマイトは推測する(KKN A 50)。原典批判版では、このアフォーリズムはもとの八折判ノートの位置から判断して、元来の104番の番号が与えられた。

最初紙片に番号をふるとき、数字をとばすということはまず考えられないから、二重番号アフォーリズムが存在することは、カフカが不適當と判断したアフォーリズムの紙片を破棄したことを示している。その場合、破棄されたのは9番、12番、71番である。また、65番と89番の紙片は、カフカ自身によって破棄されたのか、何らかの理由で紛失したのかは、どちらとも判断できない。しかし、カフカが何枚かの紙片を破棄したことは確実なのだから、前稿で推測したように、カフカが89番の紙片を破棄して、104番のアフォーリズムをあえて89番に持ってきた、という可能性もまったく否定することはできない。

カフカがこのような紙片作成の作業を開始したのは、1918年2月19日以降で、2月21日にはすでに作業がかなり進んでいた、とシレマイトは見ている。というのは、2月19日の「直観と体験」のアフォーリズム(KKN 92/14-93/2)と、その次に書かれている2月21日の「悪魔的なものに関する知識……」のアフォーリズム(KKN 93/3)の間には、大きな書体の変化があって、しかも「後者の書体は著しく小さな、規則正しい几帳面な書体で、明らかに紙片の清書書体との類

似を思わせる」からである(KKN A 51)。

このことは、カフカがなぜアフォーリズム集の編纂を思い立ったのか、という問題に対する重要なヒントを与えてくれる。「直観と体験」のアフォーリズムは、カフカの友人である、哲学者フェーリクス・ヴェルチュの論文「体験と志向」に触発されて成立した(カフカは「志向(Intention)」を「直観(Intuition)」と書き間違えたものと考えられる[前稿「下」90頁])。すでに前稿でも指摘したように、カフカはプロートやヴェルチュなどの友人たちと、文学のみならず哲学的問題についても絶えず議論をしていた。友人の哲学論文を読むことは、この頃やはりアフォーリズムという形で哲学的問題を考察していたカフカに刺激を与え、自分もまた現在行なっている哲学的考察をまとめてみようという意欲を起こさせた、と想像されるのである。つまり、このアフォーリズム集の意義の一つは、前稿でも主張したように、友人たちと日頃から行なっていた哲学的対話を、書物や論文という形で継続することであった。しかしながら、チューラウではアフォーリズムの編集作業は完了せず、作成したアフォーリズム紙片はそのまま放置されることになった。

(2)書類束の配列

1920年になってカフカは、1918年に作成したアフォーリズム集に、書類束AとBに書いたアフォーリズムの一部を追加並記した。プロート版全集では、39a・2番と、109・2番の元になるアフォーリズムが、書類束に見出されなかったが、原典批判版によれば、これらのアフォーリズムも書類束に書かれている(39番はKKN 322, 109番はKKN 254)。あらためてプロート版の杜撰さにはあきれさせられる。

前稿では、新しいアフォーリズムが1920年のいつ頃から書き始められたか、ということ推定する際、私は、プロート版全集における書類束AとCは、ほぼ執筆順に配列されているものと想定したが、原典批判版によって、これがまったくそうではなかったことが明らかになった。すでに前稿でも述べたように、書類束A, B, Cの紙質はすべて同じであるが、そこには紙が二つに折り畳まれた状態

で記入されたCと、それが広げられた状態で使用されているAとBがある。AとBは本来同じまとまりであったものを、プロットが分けてしまったものである。しかも、A、B、Cともその配列はカフカの執筆順とは別物になってしまった。CがA+Bよりも前に書かれたことは、私の想定通りであったが、それぞれの内部における用紙の配列はプロット版とはまったく異なっている。

元来はばらの用紙である書類束の執筆順配列を再構成するシレマイトの方法は、基本的には1988年の論文に述べられているのと同じであるが、以下のようなものである。もし内容的に連続した記述が一枚の紙から別の紙へとまたがって書かれていれば、この二枚の紙は連続して書かれたことが明らかである。このようにして連続することが確実な用紙のセット(原典批判版ではシレマイトはそれをSequenzと呼んでいる)をまず確認する(そうした連続関係が確認できない用紙は、一枚で独立したセットになる)。次に、この連続セットどうしの間で、いくつかのセットを内容的な関連、書体の類似などによってまとめる。次に、セット間の前後関係を、書体、インクの太さなどといった視覚的要素と、書類束と密接に関連しているミレナへの手紙との関連という内容的要素によって、確定してゆく。そうすれば書類束全体の執筆順序が確定されることになる。

その結果シレマイトは、カフカは8月21日からCを書き始め、8月26日からA+Bを書いたと推定している。アフォリズムが書かれているのはA+Bであるが、その合計40枚の用紙のシレマイトによる執筆順配列を以下に示そう(KKN A 73. SはSequenzの略で、S1はセット1の意。Bl.はBlattの略で、セットを構成する用紙、Bl.1は第1枚目用紙の意。244/7は原典批判版の244頁7行目の意)。

表3 書類束A+Bの配列

S 1	Bl.1-3	244/7-251/10 (小槌を自慢する牢獄の大尉)
S 2	Bl.4-13	251/11-281/26 (『考察』99・2, 106・2, 109・2, 76・2)
S 3	Bl.14	282/1-285/3
S 4	Bl.15	285/4-288/2
S 5	Bl.16	288/3-291/2

S 6	Bl.17-19	291/3-300/7
S 7	Bl.20-24	300/8-314/22
S 8	Bl.25	315/1-318/4
		318/5 - 319/24 (『町の紋章』—原稿なし)
S 9	Bl.26	320/1-323/18 (9月15日の日付, 『考察』26・2, 39・2)
S 10	Bl.27	324/1-327/8
S 11	Bl.28	327/9-330/15
S 12	Bl.29-30	330/16-336/19 (『考察』54・2)
S 13	Bl.31	336/20-339/19
S 14	Bl.32	340/1-342/26
S 15	Bl.33-34	343/1-347/19 (『考察』29・2)
S 16	Bl.35-36	347/20-352/6
S 17	Bl.37-39	352/7-362/7 (チューラウとプラハの相違)
S 18	Bl.40	361/8-362/7

シレマイトによる配列を見て気づくことは、カフカがアフォーリズムを色々な時期に、書類束の色々な場所に書いていることである。上の表では最終的に『考察』に採用された追記アフォーリズムだけを記してあるが、そのほかのアフォーリズムも書類束のあちこちに散見される。つまり、私が前稿で考えたように、カフカはミレナとの関係が危機に瀕した9月15日以降になってから、アフォーリズムを集中的に執筆したのではなく、書類束A+Bの最初にもアフォーリズムを書いていたのである。アフォーリズムのこのような執筆状況は、どのように説明できるだろうか。

ここで注目すべきことは、A+Bの冒頭に「小槌を自慢する牢獄の大尉」の短編作品が書かれていることである。前稿によれば、この無力な「小槌」は『考察』というアフォーリズム集を指す隠喩にほかならなかった。前稿では、この作品は1920年のアフォーリズム集の編集作業がほぼ終わった段階で書かれたと考えたのであったが(前稿「下」135頁以下)、シレマイトの配列が正しいとするならば、このような想定は撤回しなければならない。しかし、それにもかかわらず、この作品が『考察』を主題としている、という私のテーゼは、基本的には変更する必要はないと思う。というのは、この短編作品を書いた二日後の8月28日に、立て続けに四篇のアフォーリズムが書かれているからである(そのうち三篇はのちに

『考察』の紙片に追記されたアフォリズムである)。Cにはアフォリズムは一篇も書かれていないのに、A + Bの最初の部分にはアフォリズムが書かれているということは、カフカがCを書いた段階では、まだ八折判ノートやアフォリズム集の紙片を参照していなかったのだが、A + Bの記入し始めた頃、かつてのチューラウのノート類を参照したということを暗示している。そうすると、「小槌を自慢する牢獄の大尉」の短編は、まさに『チューラウ・アフォリズム』を参照したことに刺激を受けて書かれた作品ということになるだろう。

シレマイトによれば、この作品は8月26日に書かれているが、彼がこの時期に再びこのアフォリズム集に戻るきっかけとなったのは、1920年8月上旬にプロートの宗教哲学的著作である『異教、キリスト教、ユダヤ教』の原稿を読んだことである。カフカはプロートの異教理解を批判するために、1920年8月7日のプロート宛の手紙で『チューラウ・アフォリズム』の一篇を、やや形を変えて引用したが[13]、それはおそらく記憶に頼ったもので、八折判ノートを参照したものではなかつただろう。しかし、文学的創作意欲が高まってきた8月下旬に、彼はあらためて八折判ノートを参照し、それに触発されて、アフォリズム集を主題とする「小槌を自慢する牢獄の大尉」の短編作品を書き、さらに8月28日には、『チューラウ・アフォリズム』と同じスタイルの数篇のアフォリズムを書いた、と考えられる。

彼が次にアフォリズムを書いているのはS2で、8月31日である(『考察』76・2番のアフォリズム)。このあとは二週間にわたってアフォリズム的な記述はなくなるが、それが再び出現するのはS9、9月15日という日付の入った用紙である。この用紙には、15日、16日、17日、18日、21日の日付があり、その日付のもとで、それまでの文学的創作と比較すれば著しく短いアフォリズム的な記述が連続して書かれている。すでに見たように、9月15日はカフカが、ミレナとの関係を継続すべきか断念すべきか、揺れ動いた日である。恋愛関係の転機に直面して、カフカは明らかにチューラウで行なったと同じ「日付 + アフォリズム」という形式で自己省察を行なおうとしたのである。ところが、すでに確認したように、ミレナから再三和解を促す手紙が届き、それによってカフカも態度を

和らげ、両者の関係は一時はもとの鞘に戻ることになった。そのことを端的に示しているのが、S 10(この用紙は9月22日以降に書き始められた)の二番目の記述で、カフカ自身によって「地固め(Konsolidierung)」と題されている短編である。シレマイトはこの作品は、危機のあとの関係の再修復の局面を反映している、と見ているが(KKN A 89)、まさに「雨ふって地固まる」というわけで、けだし妥当な判断であろう。というのは、先にも見たように、9月22日にはミレナから謝罪の手紙が届き、カフカもミレナと和解することにしたからである。このことが、9月22日以降「日付+アフォリズム」という『チューラウ・アフォリズム』の形式が放棄された理由であろう。

その後、S 10とS 11にはアフォリズムはなく、S 12からS 17にかけて再びアフォリズム的な記述が散見される(もっとも、短かな散文作品とアフォリズムとを区別することは難しいのではあるが)。S 12はミレナの流感による文通の中断の時期の用紙で、ここに例の「ほんの一言……」という記述があるが、ミレナとの関係の一時的断絶が、カフカの動揺を引き起こし、彼を再びアフォリズム的考察に誘ったのかもしれない。その後が続くのは、カフカのサナトリウム行きの計画が具体化し、それと同時に、ウィーンでのミレナとの再会に対する恐れが強まってくる時期である。これは10月の後半から11月の終わりまで続いた。内面の激しい葛藤の末、12月の初め、カフカは当初計画していたグリメンシュタインではなく、ホーエ・タトラのマトリアリのサナトリウムに行くことを決心するが、この計画変更には、ミレナとの再会を避けるという配慮が強く働いていたのである。

S 17には「チューラウとプラハの間の相違」(KKN 354)という断想が書かれている。シレマイトは、この用紙は11月半ばから12月半ばにかけて記入されたものと推定しているが、もし「告白と嘘」のアフォリズム(KKN 348)が、私の推定通り11月26日頃書かれたとするならば、これよりも後ろにある記述は11月末から12月に入ってからのものであるということになるだろう。この頃カフカは、サナトリウムへの出発の前に、八折判ノートとチューラウで作成したアフォリズム紙片を読み直し、それに書類束A + Bに書いたアフォリズムから適当な

もの八篇を選抜して、チューラウで作成した紙片に追記したのであろう。それはマトリアリ行きが意味する、ミレナとの最終的な訣別に先立って、チューラウとブラハの「精神的戦い」の「相違」を確認するためであったろう。その結果は、「彼は一つの彫像を彫り上げたと思っていた。しかし、実のところ、ただ同じ刻み口をいつまでも鑿でたたいていただけだった。それも頑迷さのためだが、さらにはむしろ途方にくれてやったことであった」(KKN 355)という、あまりかんばしくないものであった。その結果彼は、「彼女が彼の気をそらせた」(KKN 355)と書いたが(これは原典批判版になって載せられた記述である)、この「彼女」とはまさにミレナにほかならない、とシレマイトは言う(Schillemeit 1988, S. 301)。

元の1917/18年のアフォリズムと、追記された1920年のアフォリズムの内容的な関連、および新旧のアフォリズムの「相違」については、すでに前稿で述べたことがそのまま妥当するであろうから、ここでは再論しない。

注

[1] 中澤英雄「カフカのアフォリズムの謎(上)」東京大学教養学部外国語科研究紀要第38巻第1号, 1991年3月。「カフカのアフォリズムの謎(下)」東京大学教養学部紀要・比較文化研究第29輯, 1991年3月。以下ではこの論文を前稿と呼ぶことにする。

[2] Franz Kafka, Briefe an Milena. Erweiterte Neuausgabe. Hrsg. von J. Born und M. Müller, Frankfurt/M. 1983。以下ではこれをMNと略記する。

[3] Franz Kafka, Briefe an Milena. Hrsg. von Willy Haas, Frankfurt/M. 1952.

[4] Franz Kafka, Hochzeitsvorbereitungen auf dem Lande und andere Prosa aus dem Nachlaß, Frankfurt/M. 1966。以下ではこれをHと略記する。

[5] Jost Schillemeit, Mitteilungen und Nicht-Mitteilbares. Zur Chronologie der >Briefe an Milena< und zu Kafkas 《Schreiben 《im Jahr 1920, in: Jahrbuch des Freien Deutschen Hochstifts, Tübingen 1988, S. 253-303。以下ではこの論文は《Schillemeit 1988》と略記する。

[6] シレマイトは原典批判版の校注巻においては、「連続セット(Sequenz)」という用語を用いているが、その意味するところは同じである。

[7] KKN = Franz Kafka, Nachgelassene Schriften und Fragmente . Kritische Ausgabe. Hrsg. v. J. Schillemeit, Frankfurt/M. 1992.

[8] もっとも、原典批判版によれば、二つの引用の間には別の記述があるから、厳密に言えば、二つの引用は連続して書かれているのではない。

[9] Klaus Hermsdorf, Franz Kafka. Amtliche Schriften, Berlin 1984, S. 435.

[10] ただし原典批判版を見ると、この記述は最後から二番目で、「最後から三番目」というのは誤りのように思える(KKN 333)。

[11] Hartmut Binder (Hrsg.), Kafka-Handbuch. Bd. 2, Stuttgart 1979, S. 597.

[12] KKN A = Franz Kafka, Nachgelassene Schriften und Fragmente .
Apparatband. Kritische Ausgabe. Hrsg. v. J. Schillemeit, Frankfurt/M. 1992.

[13] Franz Kafka, Briefe 1902-1924. Hrsg. von M. Brod, Frankfurt/M. 1966 (7. bis 9. Tausend), S. 279f.